# 頭の洗濯

ユーモアエッセイ集

吉田健一

# 頭の洗濯

ユーモアエッセイ集

吉田健一

番町書房

頭の洗濯

昭和五十一年十一月十日　初版発行

検印廃止

定価はカバーと帯に表示してあります。

著者　吉田健一

発行者　村川修二郎

印刷　松濤印刷株式会社
太陽印刷工業株式会社

製本　株式会社明泉堂

発行所　番町書房

東京都中央区京橋三ノ五　〒一〇四　主婦と生活社内
TEL(五六七)〇三一一(代)振替 東京5―一五八四四

© Kenichi Yoshida, 1976 Printed in Japan
(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

# 頭の洗濯　目次

初めに一言 11
洗って染める 13
自戒 15
旅行 17
道連れ 19
家に戻る 21
人の振り 23
緊張 26
下心 28
言葉 30
五感 32
出来事 34
記憶 36
歴史 38
生活 41

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

逸話 43
逸話、又 45
歴史に就て、又 47
革命 49
現状 51
刹那主義 53
無題 56
過失 58
論語読み 60
政治 62
抗議 64
専門 66
もの好き 69
馴れ 71
爪を隠す 73

空白 75
力学 77
休息 79
立場 82
高説 84
おらが国 86
昔話 88
故郷 90
旅行記 92
人間 95
科学 97
専門、又 99
遊び 101
人込み 103
自我 105

我に返る 107
回復期 109
国際人 112
やり切れない話 114
生き残り 116
窮屈 118
笑い草 120
漫画 122
愚民 124
暗君 127
地理 129
見学 131
文明 133
進歩 135
戦後 137

占い 139
帰去来 141
奢り 143
世界 146
国際人、又 148
予備知識 150
区別 152
ドイツ 154
日本 156
古い 159
広い 161
文明、又 163
交流 165
鎖国 167
蛮族 169

胡人 172
中共 174
幻影 176
残光 178
史眼 180
閑居 182
駈け引き 184
からくり 186
国事 189
曲解 191
就職 193
国力 195
腰掛け 197
抗毒素 199
住宅 201

質素 203
情緒 206
仕来り 208
世間 210
女 212
海 214
音楽 216
お嬢子 219
月夜 221
結句 223

装幀 山藤章二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

# 頭の洗濯

# 初めに一言

我々がものを考える時に使うのが頭であるばかりに、頭と言うと知性とか、思想とかいうことに直ぐなるのは、我々が自分の頭に余り注意を払っていないことを示すものに違いない。頭で考えるだけではなくて、実際は我々が泣いたり、笑ったりするのも頭があってのことで、そこまで気が付けば、所謂、考えるというのが頭がする仕事の一部に過ぎないことがはっきりする。又、その考えるというのも、頭がする各種の働きの一つに便宜的に付けた名前で、例えば、それと感じるというのがどう違うのか、その考えるということを少しもしないで、あることを可笑しいと思って笑えるのか、こういうことは二度とないだろうという感じがして泣くのが考えることではないのか、というようなことになると、心理学の参考書も余り頼りにならない。自分は考えているのだろうか、それとも、感じているのか、でなければ、これが意志というものではないだろうかなどと考えているうちには、頭の働きも止ってしまうことになる。

確かなのは、我々が色々そういうことをして、自分が自分であることを得る場所は皆、頭だと

いうことで、その証拠に、頭が胴体を離れると、我々は死ぬ。尤も、我々が頭でしている積りでいることが実は体の他の部分で行われているということもあるらしくて、それで昔の人は腹で考えるのだと思ったり、肝臓が勇気と関係がある器官だったりした。我々には胃袋というものがあることも忘れてはならない。胃が悪いものだから、何でも重苦しく感じられて、何故、人間は生きているのだろうなどという風な世界観に達するというようなこともある訳で、併しそれでも、胃が悪ければ頭に響いて来ることはこのことによっても解る。胃がなければ、空腹にならないが、それ以上に、頭がなくては、死んだ人間が空腹を感じることはない。やはり、頭は大切で、その頭をただ、ものを考える場所位に思っていても、どうにかその働きを止めずにいてくれるのは、可哀そうなようなものである。

併しそれでいいということはない。胃が悪くても頭に響くのだから、何でも我々の内外のことは頭に集まって来て、それをほうって置いても今直ぐにどうということはないが、大小の故障が積って行くうちには、しまいには時計も止る。そしてこれは胃や肝臓が悪いのよりももっと厄介で、そういうことならばはっきりそれと解るから、必要な処置が取れるのに対して、各種の雑音にさらされ続けていることから生じた頭の狂いは、それに気が付くのは容易なことではなくて、大概は手遅れのままで終って損をする。併しそうかと言って、初めから使わずに置く訳にも行かないから、偶にはいつもと違ったことに使って見て、狂いの程度を験すのに限る。一種の洗濯に

なって、少しの染みならば、取れることもある、という位の気持で、これからこれを書き続けたいと思う。

## 洗って染める

頭の洗濯をすると、赤く染まるなどというのは大嘘の皮である。今日の共産主義に対立するものがキリスト教なのだそうであるが、新約聖書に、悪魔に取り憑かれた人間の頭から悪魔を追い出して、綺麗に掃除したら、これは住み心地がいいというので大小の悪魔どもが押し寄せて来て新たに巣を作り、その人間は前よりもひどいことになったという話がある。今では、これが簡単にやれる注射薬があって、頭を空っぽにした後はそこにどんな考えでも自由に吹き込むことが出来る。併しそれをやらずに、洗脳などと手間が掛かることをするのは、人間に無料で奉仕させるのが普通のことになっている国では、この方がそのスコポラミンとかいう薬を使うのよりも安く付くからに違いない。

つまり、これは頭を綺麗に洗濯した後で、改めて好きな色に染めるのであるから、染脳である

筈なのに、それをそうは言わない所に、現代の宣伝の秘密がある。勿論、赤いのが一番綺麗な状態なのだという前提を呑みさえすれば、染脳が洗脳であっても少しも構わない訳で、自分が広告する品物が一番いいのだと信じることに広告業者の良心が掛かっている。併し頭は、脳味噌の天然の灰白色の他にはどんな色もしていないのが、最も健康なのに決っている。というのは、頭が一つの線に沿ってしか働かなくなるのをいつも防いでいなければならないので、これがそう簡単なことではない。それを防がずにいる方が楽だからで、洗脳が必要な程、多勢の健康な頭の持主がいるのが寧ろ不思議な位である。それで、この洗脳のことをよく聞かされるのが、ソ連よりは中共であるのも頷ける。支那の方がロシアよりも文明の程度が高いからである。

そのことでも解る通り、頭がある決った具合にしか働かないのは当人にとって楽でも、楽なのがいいとは限らないことの一例がそこに見られる。方々に埃が詰った機械が、僅かに残された空白の範囲内で動いているようなもので、昔の支那人、或は日本人は、そういう頭を持った人間のことを頑迷固陋という風に言った。筋金入りということと同じで、頭に筋金が通っていれば、当然のことながら、聞き分けが悪くなる。併し面倒なのは、洗脳されたり、ソ連から送り帰されて来たりしなくても、自分の頭の働き方に気を付けていないとそれが筋金入りになることで、改めて考えるのがいやで幾つかの出来合いの考えに頼っているのも、立派な筋金入りである。それ故に、これとは別な考えに出会うと、日曜日に目覚し時計に起されでもしたように猛烈に反対する



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong